▸ 論　文 ◂

富山県における実習現場から保育者養成校へ求めるもの

Requests Made by Kindergartens, Nursery Schools and Child Welfare Facilities in Toyama for Nursery School Teacher Training Programs

開　　仁　志
HIRAKI　Hitoshi

Ⅰ　目的

保育者を養成するために、重要な位置を占めているのが、現場における実習である。学生は、実際に保育実践を観察・体験することで、保育者としての専門的素養を身につけていくことになる。これは保育者養成校（保育士・幼稚園教員を養成する学校。以下養成校。）で行う講義や演習だけでは得ることができない部分である。

この実習において、大切になってくるのが、実習現場と養成校の連携になってくる。全国保育士養成協議会が出した「保育実習指導のミニマムスタンダード」では、副題を「現場と養成校が協働して保育士を育てる」[i]としていることからもそのことが窺える。保育実習指導のミニマムスタンダード（以下 MS）の目的としては、実習現場と養成校が共通理解して実習を進めていくために、実習指導計画や記録、評価の統一様式を提案することである。この統一様式を使用していくことによって、ある程度統一した見解で実習を行い、保育士養成の質向上への効果が期待できるとされている[ii]。

MS では、実習指導の統一様式への試みがなされており、実習現場と養成校の共通理解を図る上では、一つの指標となると考える。しかし、全国で使用することを前提としたために、あくまでも最低限の統一基準とならざるを得ず、地域性、実習ごとの個別性、実習現場や養成校の固有性などには対応できない面があることは否めない感がある。

また、MS では、保育士養成における実習のみを対象としている。しかし、幼保一体化が今日的課題となっており、保育士養成と共に幼稚園教員養成を行っている養成校が多い現状を鑑みると、幼稚園教員養成における実習（以下教育実習）も視野に入れていく必要性があると考える。

次に、実習現場から実習に際して、養成校に対してどのような要望が出されているかである。

河野ら（1994）の調査によると、養成校の授業に対して臨むこととして、「実習以外の子どもと接する機会の充実」、「保育所の実態を踏まえた授業の充実」「子どもの心理発達についての基礎理論」等が上位に挙がっている[iii]。また、柴原ら（1995）の調査によると、実習に臨んでの準備として、「発達段階の理解・かかわり合いの仕方」「健康面（自己管理）での配慮」「教材準備・具体的展開の仕方」が上位に挙がり、実習生受け入れに際し注目する点として、「保育への意欲、実

習に対する目的意識」「明朗性」が上位に挙がっている[iv]。要約すると、実習に向けて子どもに接する機会を多く持ち、保育所の実態や子どもの発達を踏まえ、教材準備を行うなど目的意識を持ち、健康明朗な実習生を望んでいると言えよう。

河野ら、柴原らの研究はいずれも保育士養成の保育所における実習（以下保育所実習）を対象とした調査である。従って、保育士養成の施設における実習（以下施設実習）や教育実習における実習現場の要望は必ずしも明らかになっていない。

実習生を対象とした調査としては、施設実習において実習生に求められたことを明らかにした調査（開、2008）や、教育実習において実習生に求められたことを明らかにした調査（開ら、2009）等が挙げられるが、実習現場を直接対象とした調査ではないため、必ずしも実習現場が求める要望とは言えない。

以上のような現状を踏まえ、本研究では、各実習（保育所実習、施設実習、教育実習）における実習現場から養成校に求める要望を調べ、実習ごとの共通性や個別性を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　方法

１．富山県保育実習連絡協議会の記録を分析・考察する。

より具体的な実習現場の意見を明らかにするため、調査対象を富山県における保育者養成に関する実習とした。このことから、富山県における保育者養成に関する実習を取り扱う団体として富山県保育実習連絡協議会（以下協議会）の記録を取り上げる。さらに、その中でも、実際に実習現場からの参加があり、意見を聞いている平成 22 年度富山県保育実習連絡協議会の記録の内容から、実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類する。

⑴日程

2009 年 12 月 8 日（火）14:00～16:30

⑵場所

富山短期大学

⑶出席者

オブザーバー

・富山県厚生部児童青年家庭課 1 名
・富山市福祉保健部こども福祉課 2 名
・富山県保育連絡協議会 1 名
・富山県保育士会 1 名

養成校

・富山県立保育専門学院 2 名
・高岡第一学園幼稚園教諭・保育士養成所 3 名
・富山福祉短期大学 2 名

・富山短期大学 10 名
・富山国際大学 4 名

２．富山短期大学幼児教育学科で行われている実習懇談会の記録を分析・考察する。

協議会では、主に保育士養成について取り扱っているため、教育実習についての実習現場からの要望を明らかにするのは難しい面がある。実習ごとに実習現場からの要望を聞く場をもつ必要がある。しかし、実習ごとに実習現場から意見を聞く場である実習懇談会を開催しているのは、富山県においては、富山短期大学幼児教育学科のみである（2010 年現在）。このことから、富山短期大学幼児教育学科で行っている実習懇談会の記録を基に、実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類する。

Ⅲ　結果及び考察

１．協議会の記録から見る養成校への要望

協議会では、様々な意見交換がなされたが、その中でも、実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類すると以下のようになる。

(1)マナー

「身だしなみや人としてどうかということが結構問われている」という意見が見られた。

(2)基本的生活習慣

「これまでは、学問的なことをだけを教えていればよかったが、今では生活の仕方まで教えないといけなくなっている。～中略～しかし、養成校に「教えて」というのは無理で、やはり家庭が教えるべきことである」という意見が出た。

(3)表現力

「感じたこと等、自分を素直に表現できない若い人が多い。『楽しい』『嬉しい』等、感じたことを表現してほしい」という意見があった。

(4)指導案

「全日・部分実習で、前の日に指導案を書いてきたりしてもらうと、なかなか指導ができない。学校でもオリエンテーションはしているとは思っているが…」という意見があった。

これに対して、養成校からは、「どうしたら生活力のついた、たくましい保育者になれるのか、ということが課題だと思う」、「求められる課題は、どんどん高度なものになっているが、その一方で、学生のほうは全入時代に入っている。養成校、現場、行政が一体になって対処していくことが必要である」、「ボランティアや部活動に取り組み、ノートを取る習慣をしっかり身につけることが、コミュニケーション能力をつくるために重要なことだと思う」等といった意見が出された。

以上のように、養成校として実習現場から出た要望を受け止め、対応していこうとする意見が出されていることは、養成校と実習現場の連携の上で、大変有意義なことだと考える。特に、「ノートを取る習慣」「ボランティアや部活動の推進」といった具体的な案が改善につながっていくと考える。

最後に、実習懇談会で実習現場から出た要望の項目をまとめると、**(1)マナー(2)基本的生活習慣(3)表現力といった、＜＜実習生の態度＞＞**に関わる要望と、**(4)指導案といった、＜＜文章力＞＞と＜＜計画力＞＞**の要望に分かれると考える。

２．実習懇談会の記録から見る養成校への要望

協議会記録では、主に保育士養成に関しての要望が明らかになった。本節では、実習種別ごとに、実習懇談会記録を読み取り、実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類する。

(1)保育所実習に関する実習懇談会

①3 歳未満児を対象とした保育所実習

富山短期大学幼児教育学科（以下幼児教育学科）では、1 年次に学内の付属幼稚園で行われる教育実習の後、初めての外部で行う実習として、3 歳未満児を対象とした保育所実習を行っている。その実習の際に実習生を受け入れた保育所の実習現場から実習担当者を招き、実習懇談会を開催した。実習懇談会は、2010 年 12 月 8 日(水)15 時～16 時半にかけて行われ、実習現場からは 10 名の参加があった。記録を実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類すると以下のようになる。

1)文章力

「文章を書くのが得意な子と得意でない子の差が大きい。～中略～学校でも論文やレポートの指導をしていただければ」との要望が出た。

2)実習日誌

「日誌に関しては、これでいいのかなと悩んだ。一つの場面を捉えて詳しく書けばいいのかな、先生たちはどういう指導をしているのかなと思った。実習日誌の統一の方はどうなっているのかお伺いしたい」という意見や、「漢字の方がいいと思われるところがひらがなで書かれていた。見やすい日誌の書き方があっていいのではないか」という意見、また、「実習日誌の書き方であるが、どこまでどういう風に統一されているのか気になった。要点を捉えているもの、だらだら書いているもの、箇条書きにしているもの、すかすかなもの、たくさん書いているもの等、様々である」という意見があった。

3)体調管理

「残念だったのは、体調を崩した実習生がいたことである。実習期間の途中に休日もあったのに、1 日休んで出てきてはまた休むということが繰り返された」という意見があった。

4)積極性

「素直で落ち着いていたが、もうちょっと、笑顔があってもいいかなと思った。緊張していたのかもしれない」や「こちらから促したことはしてくれた。次回からは、もっと積極的に動いたらいいと思う」といった意見があった。

5)臨機応変性

「曖昧で漠然としたものは捉えにくい。こういう場合もあり、こういう場合もあるということは、なかなか伝えにくい」という意見や、「真面目だが、もう少し臨機応変であってほしい」という意見があった。

6)発達理解

幼児教育学科から、「『発達の理解が足りないのではないか』との実習現場からの指摘が複数あるがどう考えるべきか」という質問がなされた。これに対して、「実習は学校で学んだことを確かめたり実感する場なので、それほど発達についての知識が足りないとは感じない。現場で確かめることが大切である」という意見や、「本に書いてあることと現場とでは違う。評価でも『気付く』ということが一番大事である」との実習現場からの意見があった。

以上のような話し合いを経て、幼児教育学科から、実習日誌の書き方について、「実習生には同じ様式のものを持たせている。流れに沿って書く方法（初期の段階ではスタンダードなやり方)、エピソードを取り出して書く方法等いろいろな書き方があって、実習先に合わせるように指導している」との説明がなされた。この見解については、実習現場としては、「ある程度様式は整っていた方がよい」という考えと、実習日誌を「見る側と書く側の意思さえ統一して出発すれば、それでいいと思う」という考えの両論あることが明らかになった。また、「情報としていただければ、ずっと言いやすい。オリエンテーション時に共通意識を持たせていただければよい」という意見があった。

最後に、実習懇談会で実習現場から出た要望の項目をまとめると、**(1)文章力(2)実習日誌といった＜＜文章力＞＞**に関する要望、**(3)体調管理(4)積極性(5)臨機応変性といった、＜＜実習生の態度＞＞**に関する要望、**(6)発達理解といった、＜＜子ども理解＞＞**に関する要望になると考える。それに加えて、**養成校側の指導と実習現場の指導の情報を共有し、＜＜共通理解＞＞**することが大きな要望となっていると考える。

②3 歳以上児を対象とした保育所実習

幼児教育学科では、2 年次に、3 歳以上児を対象とした保育所実習を行っている。その実習の際に実習生を受け入れた保育所の実習現場から実習担当者を招き、実習懇談会を開催した。実習懇談会は、2009 年 7 月 30 日(木)14 時半～16 時半にかけて行われ、実習現場からは 14 名の参加があった。記録を実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類すると以下のようになる。

1)実習評価

「『実習の評価』については基準がわかりにくく（どういったことを基準にしていいかがわかりにくい)、実習担当者が悩んでいた」との意見が出された。また、「富山県あるいは地区ごとでの基準でもあると安心して評価できるのだが」という意見もあった。さらに、「評価表の基準についてはやはりもっと情報がほしい。評価観点の部分に達成度、達成項目数によって成績が決められる形式だとよい」との提案もなされた。

2)集団、全体への対応

「『一人一人への関わりを丁寧に』という努力は感じるが、集団、全体への対応が弱いように感じる」との意見が出された。また、短期大学の２年生であり、就職間近ということから、「4 月から担任をするため危険なことへの対応など、実習段階から集団とのかかわりについても心構えを持っていただきたい」との意見も出された。

3)実習期間

「一人一人の指導ができて初めて集団への指導ができると考えている。しかしこの２週間でそれを完全に行うのには無理がある。～中略～2 週間では足りず、1 か月実習があるとできるのだが」という意見があった。

4)積極性

「おとなしいと感じることが年々増えている。もう少し前向きな積極性がほしい」という意見や、「実習生の積極性がもっとほしかった。投げかけには答えるのだが自分からの問いが少なかった」との意見が出された。

以上のことから、要望の項目をまとめると、以下のようになる。**(1)実習評価のやり方といった＜＜共通理解＞＞、(2)集団、全体への対応といった＜＜集団指導＞＞、(3)実習期間の延長といった＜＜実習期間の工夫＞＞、(4)積極性といった＜＜実習生の態度＞＞**である。

(2)教育実習に関する実習懇談会

幼児教育学科では、2 年次に、幼稚園における教育実習を行っている。その実習の際に実習生を受け入れた幼稚園の実習現場から実習担当者を招き、実習懇談会を開催した。実習懇談会は、2009 年 10 月 29 日(木)14 時半～16 時半にかけて行われ、実習現場からは５名の参加があった。記録を実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類すると以下のようになる。

1)積極性

「実習のめあてを聞いても返事ができないことが、疑問に感じた。実習中、あまり積極性が感じられず、活動を進めることには担任を頼ってしまう場面が多かった。自分なりの思いをもって臨んでほしい」という指摘がなされた。また、「お願いしたことがあると自分を発揮して、どんどん行動できる。自分からというよりは、役割を与えられると安心していきいきしている」という意見も出た。他には、「失敗していろんなことを収穫すると考えているが、学生は失敗するとしゅんとしてしまってひいてしまう。失敗を恐れず行動して

ほしい」の意見が出された。

2)遊びの提案

「自分からいろんな遊びを提案したり、教材を持ちこんで遊びを提案したりすることも投げかけてみたが、その点が難しかったのかなと感じた」という意見があった。

3)実習日誌

「実習日誌について、真ん中に線を引いて保育者と子どもの記録を分けて書いてはどうかという意見が現場から出ていた」との意見があった。

4)文章力

「現在の学生は、本を読んでいない。文章力が欠けていると感じた。ことばの膨らませ方、本から想像力を広げることが得意ではないようだ」との意見があった。

5)指導案

「教育計画を示して、事前に話すが、それに研究授業のねらいが合致していない。大きなねらいでもっと内容や考察の仕方を学校で勉強してほしい」という意見があった。

6)マナー

「日誌を取りに来る際には、驚くような服装だったので注意した」という意見や、「幼稚園の保育時間帯に電話がかかってくる。忙しい時間ははずしてほしい」との要望があった。

7)実習時期

「運動会の時期で十分に指導できないので変更してほしい」という要望が出ていた。また、「日誌を見て、一斉活動の姿を捉えているが、その時期の姿を捉えられていない印象を受けた。行事に向けての活動が中心になってしまうので、自由な遊びの時間が少なかったからかもと考える。そういう姿を見てほしかったなと思う」という意見もあった。

以上のことから、要望の項目をまとめると、以下のようになる。

(1)積極性(6)マナーといった＜＜実習生の態度＞＞、(2)遊びの提案(5)指導案といった＜＜計画力＞＞、(3)実習日誌の書き方といった＜＜共通理解＞＞、(4)文章力といった＜＜文章力＞＞、(7)実習時期といった＜＜実習期間の工夫＞＞である。

(3)施設実習に関する実習懇談会

幼児教育学科では、1 年次に、保育士養成にかかわる施設における施設実習を行っている。その実習の際に実習生を受け入れた施設の実習現場から実習担当者を招き、実習懇談会を開催した。実習懇談会は、2010 年 5 月 27 日(木)14 時半～16 時半にかけて行われ、実習現場からは 9 名の参加があった。記録を実習に関する養成校への要望に絞って取り上げ、項目ごとに分類すると以下のようになる。

1)実習評価

「評価の付け方が非常に難しい。“EVEN”につけてあげたいが、どの時点でどの程度評価してあげたらよいか、どうしたらすんなりいけるかが難しい。どうしても個人プレーになりやすい」という意見が出された。また、「評価自体をデータでいただきたい。下書きを何度も

しながら上にあげるという方法をとっている」との要望もあった。

2)実習日誌について

「日誌であるが、日記、感想そのままというのがある。どうコメントを書いていいのか困ってしまう」との意見が出された。

3)積極性について

「自分で考えて職員に聞いてきたりするという部分があってもいいのではないか」との意見が出された。

4)児童養護施設として

「気を使って実習ができない学生が一人いた。逆に子どもの方が気を使っていた。～中略～また、事前に学生が元気かどうか体調を確認してから実習に出すようにしてほしい」との意見が出された。

5)知的障害児施設として

「発達障害の人が増えている。高度障害の人もいて学生は苦労したのではないか。～中略～1,2 名に対し学生 3 名から数名というのが現状である。どういうふうに役割分担するか、事前に話し合いはしているが、実践は難しい」との意見があった。また、「施設には学生さんより年上の方が入っている。だんだん子どもに対しての言葉づかいになってしまう」との意見もあった。

6)肢体不自由児施設として

「肢体不自由児施設ということで発達障害や知的障害が重複している。実習生には、自分なりに資料やインターネットで勉強してから来てほしい」との要望が出された。

7)病院として

「重度身障者ばかりで年齢幅も広い。介護的実習や生活援助が多い。保育士は 7 名いるが、ほとんど 6 名で学生の指導を担当している。きっと、うちが一番大変と思われる」との意見が出された。

以上のことから、要望の項目をまとめると、以下のようになる。

(1)実習評価のやり方といった＜＜共通理解＞＞、(2)実習日誌といった＜＜文章力＞＞、(3)積極性といった、＜＜実習生の態度＞＞、(4)～(7)では、＜＜施設の固有性＞＞への対応である。

Ⅳ　まとめ

本研究では、各実習における実習現場から養成校に求める要望を調べ、各実習の要望における共通性や個別性を明らかにすることを目的として考察を試みた。その結果は以下のように要約される。

１．実習現場における要望の共通性

各実習間にまたがって出てくる要望について、要望の「共通性」とすると、以下の４点が挙げられる。

⑴実習生の態度

「マナー」、「基本的生活習慣」、「体調管理」、「表現力」、「積極性」、「臨機応変性」等といった実習生の態度についての指導は、どの実習においても要望として挙げられることが多い。

⑵文章力

「実習日誌」「指導案」等における漢字の使用、誤字脱字、文章表現についての指導は、どの実習においても要望として挙げられることが多い。

⑶共通理解

「実習日誌の書き方」「実習評価の仕方」等、養成校と実習現場において情報を共有し、共通理解することが、求められている。

⑷実習期間の工夫

「実習期間の延長」や「実習期間の見直し」を行い、実習をより効果的なものにしたいという要望がある。

２．実習現場における要望の個別性

各実習の特徴的な要望として、以下のような要望があり、これを「個別性」とすると、以下のようになる。

⑴子ども理解

保育所実習（3 歳未満児）では、成長が著しい時期であることから、養成校で子どもの「発達理解」をした上で、実習現場では実感として学ぶ大切さを実習生に伝えることが要望として挙げられる。

⑵集団指導

保育所実習（3 歳以上児）では、保育所実習（3 歳未満児）に比べて、「集団、全体への対応」といったクラス全体を見る目や、卒業間近の実習であることから担任としての目を持つことなどが重要視されることを実習生に伝えることが要望されている。

⑶計画力

特に、「指導案」を書くにあたり、ねらいをもって内容を考えていく力を育てることが望まれている。また、教育実習では、「遊びの提案」といった教育面が求められる傾向があることを実習生に伝えることが要望されている。

⑷施設の固有性

施設ごとに実習で求められる内容の違いに合わせた実習指導が求められている。

今回は、協議会及び実習懇談会の記録の中から、養成校への要望に絞って取り上げたため、養成校や実習生に対するよい評価については、取り上げていない。ここに、よい評価も多々あった

ことを記す。また、実習懇談会に参加している実習現場の実習担当者は、養成校と課題も含めて話し合い、よりよく改善していきたいという意欲があるため、要望も多くなっている可能性についても、言及しておく。

しかし､実習現場からの要望における共通性や個別性がある程度明らかになってきたと考える。どの実習にも求められる共通性の部分は、実習指導に限らず、日頃の教育活動全体の中で育てる部分も多い。また、個別性の部分は、実習指導の内容の改善に生かしていく工夫が求められていると言えよう。

謝辞

本研究のため、資料を提供いただいた、富山県保育実習連絡協議会及び富山短期大学幼児教育学科の教職員の皆様に深く感謝を申し上げる。

---

[i] 全国保育士養成協議会で扱う「養成校」とは、「保育士を養成する学校」という意味であり、本稿の養成校とは意味が異なる。

[ii] 全国保育士養成協議会編（2007）『保育実習指導のミニマムスタンダード～現場と養成校が協働して保育士を育てる～』北大路書房

[iii] 河野利津子・高野卓郎・須田康之（1994）「保育実習園と養成校の連携に関する研究 - 実習に対する保育所の意識 - 」日本保育学会大会研究論文集 47、pp350-351

[iv] 柴原宜幸・今泉礼右・関口はつ江・鈴木祥子（1995）「福島県における保育所実習に関する調査研究(2)～実習現場と学生との比較から～」日本保育学会大会研究論文集 48、pp404-405